

「かわたれどき」 日本画会員 朝地 信介

白寿の年の一本の白絵の具



事務局長 **福原 幸喜**

昨今の人手不足や物価高の影響はわたしたちの生活に大きく影響を及ぼしているが、作品制作についても例外ではない。毎年のように材料の値段が上がったり、廃番になったり、メーカーが廃業したり、条約や法律で天然毛や植物が規制されたり。コンピュータグラフィックスの世界ではどんどん新技術が投入されて表現の幅が広がっている一方、リアルな材料にこだわった私たちの制作の現場は厳しさを増している。

大学時代に額縁・画材店でアルバイトをしていた。油彩を専攻していた自分にとっては、買った画材の代金を自らの労働力で支払っていたという形だ。絵の具、キャンバス、筆…その頃買った室内イーゼルとキャビネットは、40年以上経った今も現役だ。その頃の自分にとっては、バイト先が宝の山のように見えていたのだと思う。

しかし、そこにはそれ以上に大きな学びがあった。キャンバスの張り方や道具の手入れの仕方、額裏の紐の結び方、展示の際の高さ調整など、今とても役に立っている技術だ。絵の具は当時ラベルに顔料の成分名が英語で書いてあったので、それを見れば色の効きや特性が類推できた。(今は記号と数字なのでさっぱりわからない。) 絵の具メーカーによって同じ名前でも色調が違うことはよくあるが、逆に、名前が違って顔料の成分が同じだと使い勝手も似ているのだ。そんなことを、店頭で「いらっしゃいませ」と言いながら学びとっていた。

ちょうどチタニウムホワイトが出てきたところで、それまでのジンクホワイトとシルバーホワイトに加えて、新しい白が出たと言ってワクワクして手に入れ使ったことが昨日のこのようだ。今の若い作家のみなさんにも素材に向き合う楽しさを知ってほしいと願う。

実は今年、同じようにワクワクして手に入れた白がある。ウィンザー&ニュートンの雲母を顔料に使ったホワイトである。日本画ではポピュラーな顔料だが油彩では国産メーカーにラインナップがない。ひょんなことからカタログで見つけ、衝動的に買ってしまった。道展の白寿の年に手に入れた一本の白い絵の具。どんな表現ができるのだろう、ワクワクが止まらない。

バイト先の額縁・画材店には当然のことながら絵描きの先生方も来店した。作品を見せてもらったり、話を聞かせていただいたり、アトリエへの配達に同行したり、個展のお手伝いをさせてもらったりと、画学生にとっては至福の日々だった。今年、「会場でおしゃべりしましょ」と呼びかけたが、それが道展の今後をつくっていくキモの一つだと思うのだ。生の言葉の力。

おかげさまで、連日盛況だった今年の第99回道展。会場がこれまで以上に活気づいていた。ギャラリーツアーやギャラリーナイト、講評会や授賞式・懇親会にもたくさんの会話や笑い声があふれていた。一方で選外の方とも何人かお話をできた。作品に寄せる熱い気持ちは何も変わらない。そんなみなさんもすべてひっくるめて「道展」なのだと思ふ。

さあ、いよいよ来年は「道展創立100周年」。ワクワクが止まらない。



1925年の第1回道展の応募数は536点、第6回展でその数は1000点を超え、戦争の影響が色濃くなる昭和10年代半ばまで1000点を下回ることにはなかった。入選数は多いときで250点程度と現在とあまりかわらず、入選のハードルは相当に高かった。戦前、道展は唯一の全道規模の公募展であり、北海道美術の発展を支える地盤となっていた。その道展が、

来年第100回記念展を開催する。1925年に誕生した道展はすでに創立100年を迎えているが、終戦の1945年とコロナ禍の2020年の2回、開催がなかったためだ。関係者は数年前から100回展に向けての準備に入っており、来年へ向けての熱気が伝わってきた。

第99回展の応募は338点、入選は215点。近年の道展は、若い世代の育成に力を入れており、21歳までを対象とするU21は今年で15回目。今展では、8000円の出品料を学生に関して5000円に値下げした効果もあり、学生の出品は43名から63名に増加したという。若い世代や出品回数の少ない作家が協会賞を受賞することも増えており、道展の新しい息吹を感じさせる。

受賞作を中心に各部門をみていきたい。吉田潤は、はじめの出品で協会賞を受賞、版画部門の協会賞は第67回展の白土薫以来二人目だという。画面中央に孔雀が大きく羽を広げ、小さな版木で刷った羽のパーツや銀箔、江戸時代の印刷物などが何層にも重なりあう。大学で日本画、大学院で版画を学んだ吉田は、二つの技法を融合して一つの画面の中に多層化した独自の世界観を生み出している。通常、協会賞受賞作は会場1室目に展示されるが、今回は版画部門に展示され、繊細かつ重厚な作品の細部まで見ようとする鑑賞者の姿が切れない空間となっていた。版画部門では、会友賞に大泉力也と外川篤司、佳作賞に三澤柗哉と越智沙織、新人賞に武田詔平と具象と抽象がバランスよく受賞している。道展は、全分野を通じて写実表現が主流だが、版画は比較的に抽象表現が多い部門となっている。

油彩は道展で最も出品数が多い。いつも協会賞受賞作



が展示される壁面には油彩部門優秀賞・新会友の本多玲亜、佳作賞の大作絢花と上野琴音のそれぞれに力のある作品が並んでいた。本多の作品は、これまで交差する電線が主役だったが、今作では画面を埋めるエアコン室外機の存在感が目をついた。最大出品数の油彩部門には力作が多く

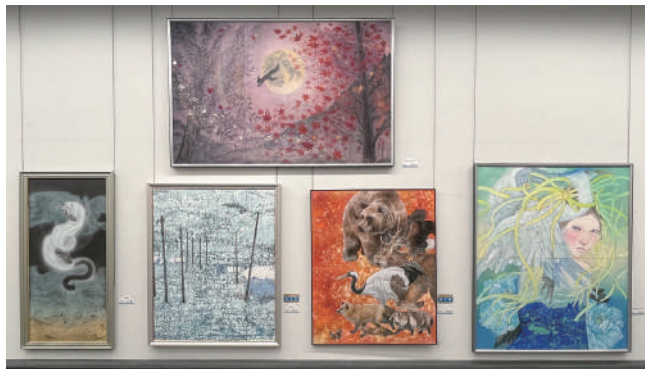
紹介しきれないが、地道に出品を続けてきた草刈喜一郎が最高齢の98歳で会友賞を受賞し新会員となったことは朗報である。

彫刻では、新会員の石垣廣、会友賞の後藤英子、佳作賞の鈴木八沖など、堅実な人体像が複数受賞しており、彫刻の基本を大切にする作品を評価したいという意向の反映であろうか。近年、紙や樹脂など素材が多様化し軽量なものが増えていることと同時に、かつては彫刻を代表する素材だったブロンズが少なくなっていることを感じる。今展では1点もないといい、ブロンズが設備や経費的な背景から姿を消していくのは寂しい。出品者の7割が若い世代だったというのは明るいニュースであり、今後も出品を続けることを期待したい。

工芸では、染織の本田詩織が昨年に続く佳作賞で新会友となった。透かし技法を駆使した奥行きのある作品は繊細かつ華やかで会場で一際目をひく。陶芸では、佳作賞・新会友の石川雅昭の穴窯を使った自然釉薬、佳作賞の小甲楠緒子の盛り上げた粘土部分への異なる釉薬の置き塗り、どちらも高い技量を感じさせる。木工では尾形心優が新人賞を受賞しているが、今回、木工の出品が尾形と会員阿部吉伸の2点のみだったのは寂しい。ここ数年、工芸部門では出品作のほとんどが焼物と染織になっており、木工や金工、漆芸、人形などの出品が少なくなっている。学校で教える工芸教科や指導者が減ったことも影響しているといい、制作環境の重要性を痛感する。

日本画では、久松祐子と俵谷舞が昨年の新人賞に続いて佳作賞を受賞している。前回、久松はヘラジカ、俵谷は駅のホームで線路部分が水面になっている作品で、どちらも印象に残っていた。今回、久松は、力強いばん馬を迫力ある画面で描き、俵谷は水中をたゆたう亀の周囲に陸に咲く花を配して幻想性を醸しだしている。新人賞を受賞した高橋麗那の作品は、画面いっぱいの動物たちの姿にエネルギーを感じるが、作者はまだ10代だという。三人とも日本画を手がけるようになってからあまり時間がたっていないとのことで、今後、それぞれに世界観を深めていってほしいと期待させる。日本画部門は、それ





それぞれに見ごたえある作品が並び、自然や動物を主題としたものが多いが、会員には、ここ数年、岩絵具という画材を使って伝統的形式から離れた作品を出品する朝地信介や上野秀実のような作家もいる。

水彩では、光さす美しい緑の風景で毎年癒してくれる斎藤誠が新会員となった。佳作賞の盛岩唯史と新人賞の中野圭子は、どちらも点描を用いているが、廃棄されたバスと水中のクラゲを描き続ける二人は、テーマも表現も異なり興味深い。水彩は、他部門と異なり多くの受賞作をほぼ横一列に並べて展示している。会友賞の久野省司、佳作賞の小笠原愛、関興一、若杉博丈の作品はどれもびやかで美しい風景画で、水彩ならではの表現である。四半世紀以上、道展を見てきたが、ある時期、水彩部門の会員の一部には、いわゆる水彩画らしい表現をさける傾向があった。水彩が洋画の一部門として油彩と比べられていた昭和を経験した世代は、油彩に比肩する画面を意識せざるを得なかったと聞いた。

部門優秀賞・新会友の岡田知之の作品は、ノスタルジーを感じさせる白昼夢の世界。アクリル絵具の岡田作品は、油彩部門にあっても違和感はないだろう。協会賞受賞の吉田もだが、昔だったら、「水彩か油彩か」「版画か日本画か」と議論になっていたかもしれない。現在の道展では、部門の選択は自由で、HPでも「描き手の考えによって」出品する部門を決めてよいことを紹介している。HPでは「教えて道展くん」で、いろいろな情報をわかりやすく伝えており、初めての出品を検討する者にはありがたい。数年前から事前にパソコン上で展示シミュレーションをすることによって会場が各段に見やすくなるなど、道展は改革を続けており、今展では、これまでは部門別に1枚だった「鑑賞のしおり」が冊子になり後からも見返しやすくなっていた。

ここ数年毎回のことであるが、会場では必ず見知った



作家の訃報に接する。今回も朝倉奈々子、加藤光彦、木村多伎子の3名が追悼されていた。中谷有逸も10月17日に亡くなっているが、審査後のことだったため、来年の追悼になるという。中谷は、版表現を拡張した作家であり、分野や公募展の枠を超えて慕われた十勝の求心的存在だった。

鬼籍に入ったためだけでなく、高齢や病気による退会、一方で活躍を期待していた若い作家がいつのまにか出品をやめていることも少なくない。道展全体では、若い世代の出品が増えているということで楽しみだが、学生が多く、卒業後も制作を続けていけるかどうかは未知数だという。公募展は、平面や立体、学生からベテランまでの幅広い世代の新作を一堂に目にすることができる貴重な場である。今回、会場の様子に目をやりながら展覧会を鑑賞したが、感想を言い合ったり、指導を受けたり、家族や知り合いの作品を見に来るなど、さまざまな姿があった。出品者にとって多くの作品の中で自分の作品を客観的にみる、他者から批評されるという経験は得難いものであることを改めて感じた。

北海道で100年の歴史をもつ団体はそう多くない。道展は、大正・昭和・平成・令和と続いてきた北海道最長の歴史をもつ美術団体である。創立会員は作品出品だけでなく、さまざまなかたちで画壇に貢献してきた。今田敬一の著書『北海道美術史』は、今でも北海道美術の歴史書の嚆矢であり、繁野三郎は、戦後、北海道の水彩画を盛んにした牽引者、能勢真美が札幌から帯広に転居したことは帯広画壇の発展に大きな影響を与えた。現在、出品者は全道に広がり、札幌以外の都市で移動展が開催され、各地の道展会員は、地元画壇を支える存在として活躍している。来年の100回展が、道展がこれまでに歩んだ道のりを今日に伝え、さらに未来へと続く道しるべとなるものであってほしいと願う。





北海道美術協会賞 吉田 潤
幽けし銀灰



水彩部門優秀賞・新会友
岡田 知之
浅い夢
～北海道開拓メリーゴーランド



佳作賞 久松 祐子
力強く、進む。



佳作賞 岩崎 陽子
Next location



油彩部門優秀賞・新会友
本多 玲亜
Throw back



佳作賞 俵谷 舞
たゆたう



佳作賞 大作 絢花
赫が



佳作賞 上野 琴音
懸命

受賞者のことば

●北海道美術協会賞

版画 吉田 潤

この度は協会賞を頂き誠にありがとうございます。版表現の可能性を試みた作品が評価され、大勢の方に観て頂けたことを大変嬉しく思います。今後もトライ&エラーを繰り返しながらエキセントリックな作品を作り続けていきたいです。次作も乞うご期待！

●油彩部門優秀賞・新会友

油彩 本多 玲亜

二度目の油彩部門優秀賞をいただき光栄です。作品タイトルの「Throw-back」は「過去を懐かしむ」という意味があり、新しい色彩でありな

がらどこか懐かしさを感じられるように描きました。社会人となり忙しい日々ですが、絵は描き続けたいと考えていますので今後ともよろしく願いいたします。

●水彩部門優秀賞・新会友

水彩 岡田 知之

受賞ありがとうございます。自分には、一貫して「白昼夢」のような世界を描きたいという思いがあります。それがどのような表現になるかは試行錯誤中ですが、アクリルというどのような表現にも対応できる画材を中心にこれからも追究していきたいと考えます。

●佳作賞

日本画 俵谷 舞

この度は佳作賞を受賞させていただき、誠にありがとうございます。今作は、亀がゆっくりと、もがきながら着実に進む姿を、自身の成長と重ね合わせて表現しました。今回の受賞を励みに、今後もより一層、表現の追求に努めてまいります。

日本画 久松 祐子

この度は佳作賞をいただき誠にありがとうございます。私は去年、帰国し北海道で自立して強く生きる気持ちを表すためにばんば馬を選択しました。色々な荷物を抱えながらも一步一步着実に前進すると言う意味で今後も精進していきたいと思

油彩 大作 絢花

このたびは、昨年引き続き名誉ある賞を賜り、誠にありがとうございます。本作は、私の内なる生き方を映し出すように描き上げた一枚です。静と動のコントラストを意識しながら制作に取り組みました。次作も、新たな表現に挑み、さらなる高みを目指して参ります。

油彩 岩崎 陽子

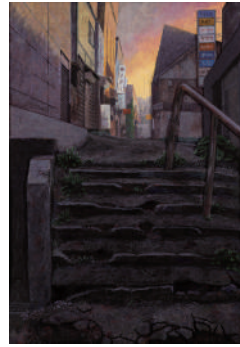
このたびは佳作という素晴らしい賞をいただき、こころよりうれしく思います。道展会員の方々に賞という太鼓判を押していただいたことにより、作品に価値が生まれたように感じました。ただのまぐれにならな



佳作賞 砂山留美子
雪化粧



佳作賞 山本 美和
Walk
～愛をくわえて歩いていこう～



佳作賞 増子 芳朗
酔客のてすり



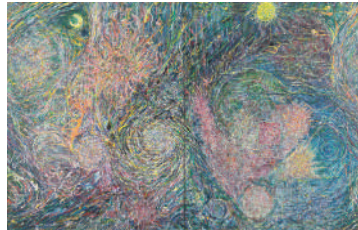
佳作賞 中本 準一
百花繚乱



佳作賞 若杉 博丈
秋水に昔日を想う
しゅうすい せきじつ



佳作賞 川村 富雄
ハシビロコウのいる風景画



佳作賞 架田 勇人
心に咲く華
はな



佳作賞 関 興一
道庁の池・晩秋



佳作賞 小笠原 愛
清 (さやか)

いように、努力していきます。ありがとうございました。

油彩 上野 琴音

昨年の新人賞に続き佳作賞を頂くことができ、嬉しさと共に身の引き締まる思いです。今回の受賞は、ご指導くださった先生方と多くの方々の励ましのおかげだと深く感じています。これからも表現を探究し続け、節目となる第100回展に向けて一層力を注ぎます。

油彩 砂山留美子

夜中に降り積った雪が、朝日に照らされてキラキラ輝く。美しい雪原を眺めながら登校した幼い頃の思い出。凍えそうに冷たく寒い時もあったけれど、雪と共に過ごした日々は私の原風景です。その思い出と、探し出合った白銀の滝の荘厳な姿が重なって今回の作品になりました。

油彩 山本 美和

ある日、私の前を雄鹿が先導しリスが尾を立て横切り兎や狐は野を走り…その姿に、いいよ!と言われた

気がして描きました(笑) 夢中で創作する事自体を喜び楽しむ事を目標に。これが人生最後の一枚なら何を描く? どう描く? と贈り物を創作するべく…精進します。

油彩 増子 芳朗

昨年に続き賞をいただき、誠にありがとうございます。踏み入ると様々な人が交差して覚束なくなる道。自分も入ったら、階段を上がったらと、視覚だけでなく空間的にも感じられないかと思って描きました。今後も工夫を重ねられるよう取り組んでまいります。

油彩 中本 準一

価値のある賞をいただき、ありがとうございます。また、2年連続で受賞をいただくことができ、とても嬉しいです。今回の評価を励みに、次回も受賞できるように、精進いたします。

水彩 関 興一

第94回道展に初めて出品して以来今回6度目の入選、とても嬉しく

思っています。その上昨年に引き続き2度目の佳作賞までいただくことになり驚くとともに、光栄なことと思っています。これからは北大や札幌近郊に残る原始の風景を描いていこうと思います。

水彩 小笠原 愛

この度は素晴らしい賞を頂き、大変光栄に思います。道内を巡りながら出会った大好きな自然風景を題材に、今回は特に光と影、また澄んだ水の流れを意識して表現しました。その場を訪れたような空気感を感じる作品を目標に、今後も精進したいと思っています。

水彩 若杉 博丈

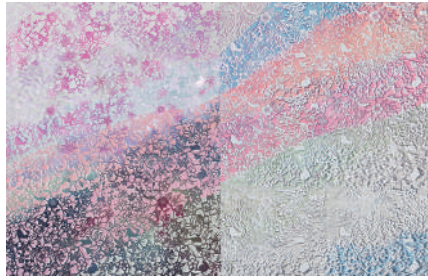
北大農場の片隅に残る小さな古い水門。幾歳月、風雪に晒され錆びついて、その役割を終えた佇まいに惹かれ作品にしました。秋水に映る姿に私自身を重ね合わせ、数十年前の学生時代に想いを馳せました。昨年に続く受賞、皆様に感謝してこれからも鋭意描き続けます。



佳作賞 盛岩 唯史
役目を終えたものへ花を贈る



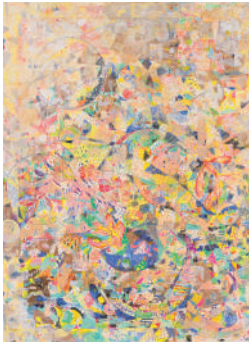
佳作賞 三澤 柊哉
Iguana's duel



佳作賞・新会友 本田 詩織
春光



新人賞 高橋 麗那
共に



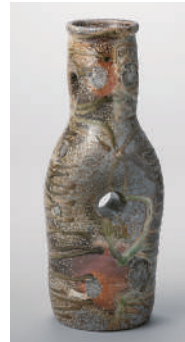
佳作賞 越智 沙織
光のかおりと風のいろ



若い女
佳作賞 鈴木 八冲



佳作賞 小甲楠緒子
ライラック壺



佳作賞・新会友 石川 雅昭
互双穴焼き締め扁壺



新人賞 小島 陽菜
まなざしの先に

水彩 盛岩 唯史

今回、佳作賞をいただいた作品は、様々な場所に捨てられた廃バスたちを、せめて桜の木の近くで休ませてあげたいという「人の思い」をテーマにしました。そんな心優しい人の思いや行動を想像しながら鑑賞していただけたら嬉しいです。

版画 越智 沙織

心の波を抱えながら、静かな希望を探し続けてきました。光やかおり、記憶の層を版に重ねることで、自分の生きた証を刻みました。受賞を励みに、これからも内なる世界をていねいに表してまいります。

版画 三澤 柊哉

作品タイトルが「Iguana's duel」です。オスのイグアナが自分の縄張りの獲得するために戦っている様子を表現しました。イグアナは自宅で飼育している子たちをモデルに描いております。作品を通して少しでも彼らが身近な存在になれば嬉しいです。

彫刻 鈴木 八冲

若い頃の私はなかなか「形」をつくることができませんでした。観た通りに作るのですが形になっていかない。長い年月が流れたある日、モデルさんを観て、感じている自分と出会えたのです。私の心に映ったままを形にしてみようと。「若い女」はその第一作目です。

工芸 小甲楠緒子

この度佳作賞を頂くことができ大変嬉しく思います。今回制作の壺を通して、丸型のラインとその膨らみの持つ力を再認識することができました。同時に、自分の表現したい事を実現させる難しさも痛感しています。受賞を励みに今後も精進していきたいと思えます。

●佳作賞・新会友

工芸 石川 雅昭

私達の穴窯は今年11月で10回目の窯焚きとなります。窯の癖が解って来て、狙いの焼き上がりが少しずつですが出来るようになって来ました。「窯焚き仲間」に感謝しつつ、

「穴窯の作品」と云う先入観に捉われない作品造りに挑戦して行きます。

工芸 本田 詩織

「春の日差しに輝く桜」をオパール加工型染（透かし模様）で表現しました。今作は、色彩が繋がるよう色糊を置き、より柄の複雑さと立体感が出るよう生地を重ね方を工夫しました。今後も、ふとした日常の美しいと感じる瞬間を染色で表現できればと思います。

●新人賞

日本画 高橋 麗那

この度は新人賞をいただき、大変光栄に思っております。日々支えてくださった先生方、家族そして友人に心から感謝しています。今後も私らしい作品制作に努めていきたいと思えます。

油彩 小島 陽菜

今回の「まなざしの先に」では、今までの自分と向き合うための作品を制作したいと思えました。下を向いて立ち止まってしまうような出来



新人賞 矢野 怜音
閑寂



新人賞
立坑槽
館小路裕範



新人賞 武田 詔平
海氷
がいのよう



新人賞 尾形 心優
hime doressâ



新人賞 大屋 結
ひとめぼれ虚数



新人賞
海月Ⅰ
中野 圭子



新人賞 平野 輝大
あかりのない公園のうた



新人賞
煩悶
太刀川道也

事があっても、差し込む希望の光を見つめて私は生きているのだと作品を通して気づくことができました。

油彩 矢野 怜音

私は落ち着いた空間が好きで、学生生活最後の道展では自分が最も好きな場所を描きました。受賞を知った時は自分の作品が少し認められたように感じました。これからも気を緩めることなく、自分が追い求める理想の作品づくりに励んでいきたいです。

油彩 大屋 結

札幌大谷大学芸術学部美術学科1年の大屋結です(あだ名はかまあげ)。大学で出会った友人をたくさん描いた、幸せを具現化した作品で、99回の長い歴史ある道展で新人賞をいただき、とても嬉しいです!この受賞を励みに、世界を目指して頑張ります。

水彩 館小路裕範

定年してから本格的に描き始めた私です。入選は3回させていただき

ました。入選4度目での新人賞受賞、古希を過ぎてからいただく事が出来る賞に大変有り難く思っております。これを機に今後は心情的な描写も目指したいと思います。

水彩 中野 圭子

私が海月に魅せられたのは コロナ禍で自粛生活の時 ふとテレビを見ると 優雅にフワリフワリと海月が…“海月に成りたい”早速筆をとり コツコツテンテン コツコツテンテン 点描をうつ度に 生命を得た 海月を海に漂わせる事が 出来ました

版画 武田 詔平

公募展に応募するのは二回目で、入選できれば是と出品したところ「新人賞」!!これには小生自身ビックリ。道新文化センターで戸山先生の版画教室にて十年余り過ごし、今回は趣味の魚釣りを目にした光景を題材にしたが、木版画にプラスαで取り組んで行きたい。

彫刻 平野 輝大

この度は新人賞をいただき、誠に

ありがとうございます。時間をかけた作品を評価していただけて大変嬉しく思います。今回は石を使用しましたが、今後は他素材にも挑戦し経験を積んでいきます。今後ともよろしくお願いいたします。

彫刻 太刀川道也

現在、生成AIと人間の関係性の表現を研究テーマとしています。本作では「悩み」という人間らしさを一つの塊として表現することを試みました。AIとの共生のあり方を模索する中で、人として大切にすべきものを見極めていきたいと考えています。

工芸 尾形 心優

新人賞を頂き誠に光栄に思います。そして、ご指導頂いた阿部先生に心より感謝申し上げます。この作品は、一日を素敵にスタートできる空間作りから生まれ、寄せ木を施した扉で華やかさを演出しました。今後も技術向上を目指し、制作を続けていきたいです。

【2026 第16回道展 U21について】

- 搬入日 2026年2月3日（火）
- 会期 2026年2月6日（金）
～2月8日（日）
- 会場 札幌市民ギャラリー

2026 第16回道展U21

札幌市民ギャラリー
札幌市中央区南一条西5丁目1番1号1F

展覧会 2026.2.6fri-2.8sun
開会時間 10:00～17:30 休会日 16:00まで
入場無料 授賞式・講演会 2026.2.8sun

公募

搬入日 2026.2.3tue
応募はWEBで—<https://doten.jp>

『第99回道展移動展のご案内』

- 第69回釧路移動展
2025年11月25日（火）～11月30日（日）
釧路市立美術館（開催は終了しました。）
- 第77回帯広移動展
2026年1月15日（木）～20日（火）
帯広市民ギャラリー

【100周年記念道展の搬入日と会期について】

- 会員・会友搬入日 2026年9月26日（土）
- 公募搬入日 2026年10月8日（木）
- 会期 2026年10月14日（水）
～10月25日（日）
- 会場 札幌市民ギャラリー

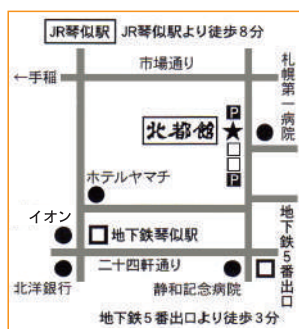
絵好きの集う店

カフェ北都館 ギャラリー

札幌市西区琴似1条3丁目1-14 第一病院向い
TEL 011-643-5051

営業時間 水～日 AM 10:00～PM 7:00
火曜定休日 月 AM 10:00～PM 5:00

メールアドレス hokutokan@sa3.gyao.ne.jp
<http://hokutokan.jimdo.com>



青・赤・白・黒は日本語における基本色名。この4色と黄色・茶色の2色のみが、～い、と形容詞にもなる。「青の靴」と「青い靴」だと同じ意味だが、「信号が青になる」「信号が青くなる」では、後者に違和感。「顔が青になる」「顔が青くなる」と例を追加してみると、名詞には「別の色への切替え」、形容詞には「徐々に変化する色合い」を表現する作用があるようだ。

C88% M0% Y5% K0%

青い空には飽きることがない ゴッホ

<https://nakanishi-shuppan.co.jp>



NAKANISHI
PUBLISHING
CO.,LTD.

since 1988

道展ニュース

No. 156 [2025年12月13日発行]

発行 ■ 北海道美術協会
編集 ■ 道展広報部
URL ■ <https://doten.jp>
デザイン ■ 笠井真紀子 (中西印刷株式会社)
印刷 ■ 中西印刷株式会社

編集
後記

現代では、SNSの影響もあって、気がつけば「どう見られているだろう」と意識してしまうことがあるように思います。ちょっとした言葉や行動にも力が入り、息苦しさを覚えることも少なくありません。そんな中で、自分の感性をのびのびと解放できる美術という

場所は、より貴重な存在になっているように感じています。道展には、さまざまな世代のさまざまな表現が混ざり合う温かさがあります。この多様さを大事にしながら、自由な表現が育つ場を、皆さんと一緒に見守っていただけたいです。
(H.F.)